

## 令和5年度 淡路くにうみ夢フォーラム 結果概要

1. 日時 令和6年3月5日（火）14:00～16:30
2. 場所 南あわじ市広田地区公民館
3. 出席者 地域づくり活動応援事業助成団体（ビジョン推進チーム）28名、  
関係団体11名、一般45名、支援会議委員3名、来賓1名、パネリスト4名  
守本副県民局長、山内交流渦潮室長、事務局7名 計101名

### 4. 内容

#### (1) 第1部 地域づくり活動応援事業（ビジョン推進チーム）活動報告会

- ①大町まちづくり協議会
- ②瓦とひなの会
- ③島の食卓～淡路島オーガニックマーケット～実行委員会
- ④諭鶴羽古道を守る会

#### (2) パネルディスカッション 「移住者×地域 共に発展する島をめざして」

##### ○コーディネーター

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科教授 山本 聡 氏

##### ○パネリスト

NPO法人あわじFANクラブ 黒川 香苗 氏

NPO法人淡路國プロジェクト 片井 一雅 氏

森のようちえん まんまる 佐藤 明希 氏

島の食卓～淡路島オーガニックマーケット～実行委員会 大田 真也 氏

(山本氏) まずそれぞれから、自己紹介と取り組まれている内容について紹介をしていただきたい。

(黒川氏) 私は、5年前に大阪から淡路島に移住してきた。3年間は南あわじ市地域おこし協力隊として、南あわじの特産品を島外にプロモーションするお仕事をしてきた。私は島でゲストハウスを作りたいと思い移住してきたので、地域おこし協力隊の活動終了後、ゲストハウスをオープンした。任期中のプロモーション活動を見てくれていたNPO法人あわじFANクラブの方に発信力を買われ、移住者ブログの執筆を担当することになり、移住者視点で島外の人に淡路島の魅力を伝えていた。その後、あわじFANクラブの相談員になった。今は、自営の仕事と並行して、移住者の受け入れのお手伝いもしている。

(片井氏) 私は、NPO法人淡路國プロジェクトとして福良を中心に、移住・起業支援を行っている。福良は、昔から漁業と商業の町だが、年々人が減ってきて、淡路の中でも急激に過疎化になっている地域。活性のためにやってきたが、地元だけでは難しいところもあると思い、10年ぐらい前から移住の方を中心に地域を盛り上げる活動をしている。

(佐藤氏) 森のようちえんまんまるは、2015年に大町で6年間活動し、3年前に上河合にフィールドを移して活動を続けている。私たちが大事にしているのは、自

分の「今・ここ」の気持ちを大事にしており、心と体、五感をフル活用してたくさん遊ぶという理念を掲げている。今日は雨だが、穴を掘ってたまった水で温泉を作ったり、スケートをしたり、自由に遊んでいる。9年目になるが、未だに史上初の遊びが生まれ、素晴らしい子ども達と一緒に遊んでいる。3歳から預かり保育をしているが、2015年当初は、園児2人だった。今はお陰様で20名の子ども達が通ってきてくれている。自分で考えて、自分で自分の明日を楽しく出来る子ども達と一緒に育てたいと思っていて、想像力と創造力の両方を養って、その子のために育みたいと思っ活動をしている。

(大田氏) 私は、2016年にサラリーマンから農業をしたいと思っ南あわじに移住してきた。移住して2年目ぐらいの時に、家と畑を買わないかという話があっ、気に入って即決で購入を決めた。「淡路島 YASAIIBA」という農園を立ち上げて、オーガニックの野菜を販売している。「島の食卓～オーガニックマーケット～実行委員会」にも4年前ぐらいから出店者として出るようになり、2年前から実行委員として運営に携わっている。

(山本氏) コロナ禍で移住の方が増えたように聞いているが、黒川さんは、5類に移行した状況や、移住者の年齢層はどのように捉えているか。

(黒川氏) コロナ禍で、パソナの本社移転もあり全国区のニュースで取り上げられたこともあっ、移住の相談が爆発的に増えた。その中で来られていた方は、ブームに乗っこられていた印象がある。今は、コロナ禍を経て、自分の暮らしを見つめなおして、それでもやっぱり田舎に住みたいというような本質的に田舎を求めている方が来られている印象がある。それ以外としては、仕事がりモートでもできるようになり、ずっと来たいと思っ、やっと来られるようになったという方。来られる方の年齢層については、3つに分けられる。1つ目は、子育て世代で大体小学生以下ぐらいがいるファミリー。2つ目は、都会で子育てを終えて子どもが大学に進学が決まっ家を出るといっタイミングで移住してきた方。3つ目は、定年後の終の住まいで、ゆっくり家庭菜園など趣味を楽しみたい方。

(山本氏) 多世代の方が来られているイメージか。

(黒川氏) そう。ただ、子どもの教育環境という意味では、高校からの選択肢が極端に狭くなるので、教育熱心な方は少ないと思っ。そこが課題だと思っ。田舎ならではの教育や、都会ではできない特色のある学びを提供できる高校や大学が増えてくると、そういうのが目的で移住される方も増えてくると思っ。私も子どものいる身として心配なところ。

(山本氏) 片井さんは、福良地域で開業を目指す方にテナントを安く貸し出すチャレンジモールを実施されていると聞っが、なぜ始めようと思っか。

(片井氏) 4年前のコロナ前に、「チャレンジモール福良 CAP」といっ商業施設を福良の道の駅付近で作った。移住者支援や起業支援を福良でやってきて、コロナ前から移住の相談をやってきたが、仕事がなければ人は増えなかつた。私たちの世代は、子どもの時から「淡路島はダメだから、出て行っほうがいい。

いい学校に出て大手企業に就職したほうがいい」と言われてきた。淡路はダメなんだという固定概念があったが、最近は淡路島に来たいという相談もあって今までにない考えが出てきて可能性も増えてきた。ただ、田舎のほうで受け入れられるかという不安と仕事があるかという不安がある。福良では、空き家が増えてきて借りたいという移住者もいるが、知らない人に貸してトラブルあった時に責任を負いたくないので、地元の人はお金儲けだけで貸すというのはなかった。ただ、知り合いだったら貸してもいいという人が多いので、知り合いになるところをまず作らないといけないと思った。また、いきなり移住してきて自分の店ができて、あまり地元を受け入れてくれないのも現実なので、地域住民と移住者の両方がうまくかみ合うような仕掛けをしないとけないと思い、福良の一等地で起業してくれる移住者の方を支援して、チャレンジしてもらってきっかけをつくる「チャレンジモール CAP」を作った。そこで店を出すことで、地域の人たちに顔を知ってもらい、地域の人と移住者の接点ができるようになる。空いている店舗を貸してと言われても、あそこの店の人なら貸してもいいか、という流れになればと思って作った。

(山本氏) 契約期間は4年間と聞いているが、契約期間後の動きはどのような感じか。

(片井氏) 4年にしているのは、4年間やって上手くいかなかったら違うことをはじめたらいいと思って設定した。1年更新だが、すぐに成果が出て独立する人もいたり、なかなか上手くできず辞めたりする方もいる。コロナ禍は苦戦もしたが、その中でも独立した方も多し。上手い具合で相乗効果が生まれていくと、福良のまちの活性化にもつながっていくと思う。

(山本氏) 地域の店舗にも移ってもらって、地域の中で移住するようなイメージか。

(片井氏) そう。もともとは福良の商店街の空き家に促したいというのが目的だった。ただ、何もなくて福良に来ては商売はできないので、チャレンジモールで顔を知ってもらい、きっかけにしてもらえればと思ってやっている。

(山本氏) 佐藤さんは、なぜ淡路の移住を考えられたのか。

(佐藤氏) ご縁があって淡路島に来て9年目になる。移住してきて、私の暮らしにもフィットしていて、ここでよかったと思って今暮らしている。淡路島は待機児童がないので森のようちえんに通わせるにはハードルが高いが、入園児のほぼ8割が移住者で、たくさん入ってきてくれている。淡路は、まんまるの活動をやるのに、大きすぎず小さすぎずジャストサイズなところがいいなと思っている。

(山本氏) 森のようちえんまんまるの子育ての特徴は。

(佐藤氏) 楽しいところ。子どもを預けて終わりではなく、月に1回保護者も含めて、どう作っていけば面白いかな楽しいか話し合っている。9年間やって一番嬉しかったのは、まんまるに出会って子育てが楽しくなったと言われたこと。預けて終わりではないのでめんどくさいが、自然があって毎日発見があって、大人も子どもも安心して育ちあえるところがまんまるの1番の魅力だと思っ

て今日も走り回っている。

(山本氏) めんどくさいという言葉があったが、めんどくさいというのは、それだけ関わりがあるということだと思う。

(山本氏) 大田さんは、移住されてきて、苦勞されたところはあるか。

(大田氏) 自分で好きなことをやってきているので、あまり苦勞とは思わなかった。農業なので肉体的な苦勞はあるが、精神的にしんどいというのはなかった。

(山本氏) これから農業を目的に移住される方に、アドバイスできることはあるか。

(大田氏) いきなり移住とともに畑を買って農業を始めるのは難しいと思う。私は最初農業法人の従業員をしていた。まず従業員として働くと、その地域のことも分かって地域のつながりもできて農地の取得につながっていくと思う。今だと、親方制度や研修生制度の補助があるので、研修をやっている方のところに話を聞きに行くなどもいいと思う。移住者の中で、いきなり土地を購入して農業やりたいという相談を受けることもあるが、誰も知り合いがいない中でいきなり始めるのは、特にオーガニックとなると難しいと感じた。ただ、新規就農時の設備投資に関しては、行政にも事前に相談したが、自分は少しの設備でやっているの、想いがあってやりたかったらできるんじゃないかなと思う。想いが大事だと思う。

(山本氏) 最後に、淡路島への移住者を増やしたり、より暮らしやすくなるためのアイデアをフリップに記入して、黒田さんから発表いただきたい。

(黒川氏) 「古民家ホームステイ」

移住の相談で一番多いのが、家がないということ。来たいという人がいるが、家がない。私は不動産賃貸業をしているが、不動産で売りに出やすいのは、おじいちゃんおばあちゃんが1人で住んでいて老人ホームに入ったから空いた家を子どもが売りに出すというパターン。それなら、おじいちゃんおばあちゃんが現役で元気なうちに、その家にホームステイできるようにしたらいいのかなと思った。私も外国に留学した際、ホームステイをして違う国の文化を学んだ。移住してきて、淡路独特のノリも感じたので、少しだけでも一緒に暮らししてみて異文化体験的なプログラムとして受け入れたりできるといいと思う。移住されてきた方は、知り合いを通して家を見つける方が多いので、移住の入口として1回ホームステイができる機会があれば、淡路島の文化も理解出来、移住の失敗も減るのかなと思った。

(片井氏) 「わか者よそ者バカ者」

移住者が来ても、地域のコミュニティに合うかが大事だと思う。よくセカンドライフで田舎暮らしがしたいと聞くと、なかなか地域のコミュニティがなかったら難しい。地元の方が拒絶することもあるので、私たちのような固定概念を取っ払うような「バカ者」を増やして上手い形で組み合わせると、必ず地域が変わってくると思う。

(佐藤氏) 1つはお家情報。今私は3軒目の古民家に暮らしている。全部地元の方の顔でお世話になって借りているので、世話人みたいな方が出てくるとありがたいな

と思った。2つ目は、多世代交流。移住先には親族はいないので、なかなか頼れる人がいない。地域の人にも自分の子どもや孫のように子ども達をかわいがってほしいし、頼れる関係性になるといい。地域ぐるみで子育ての土壌が育まれていけたら面白いんじゃないかと思っている。

(大田氏) 「この町が大好きといえる空気感」

移住してきた当初は、なんで農業なんかしにきたの、とみんなに言われた。移住者は、今の都会の生活に違和感があって移住先を選びはじめる。選ぶ際、自分の「好き」を活動にしている人が多い地域に行くんじゃないかなと思う。もともと淡路に住んでいる方も、農業が好きという気持ちはあると思うが表に出さないだけかなと思うので、好きというハッピーなオーラが前面に出していくと、地域が盛り上がっていくと思う。

(山本氏) 本日は移住を促進するために、住む場所の提供方法や地域住民と移住者の関わり、情報発信の仕方などのお話があった。お金の問題など検討する課題もあるが、課題を1つずつクリアしていくことで、地域がもっと活性化していくと思う。皆さんの経験から出てきた貴重なお話ありがとうございました。

#### 【会場からの質問】

(質問者) つながるといのがテーマで話があったが、情報社会の中で、SNS等を使ってどのようなつながりを築かれているか。

(片井氏) 地域でイベントをやる際、決まった方しか参加しないパターンが多い。NPOでイベントした時に、一般の若い方に声をかけると意外と参加してくれる。きっかけがなかっただけなのかなと思う。イベントを通じて若者同士が勝手につながって広がっていけるので、機会を与えるというのが早いのかなと思う。

(佐藤氏) 情報をきちんと発信していくことは大事だと思っている。活動をみつけてくれる人も結構いるので、情報発信することも大事。まんまるでは、パンフレットを小さくして、お店とかに置きやすいように工夫している。興味のある人は勝手に調べるので、パンフレットはほとんど写真しか載せていない。資料作りに手をかけるよりは、インパクトや伝え方を重視している。パンフレットは、みんなが立ち寄りそうな店舗や目に触れるところに置かせてもらっている。あとは、リアルに合う機会を増やすこと。こんな面白い人がいるんだと知ってあたたかい気持ちになれば、ここで居ていいんだという安心感につながるので、そんな仕掛けがあればいいのかなと思う。

【当日の様子】



開会：副局長あいさつの様子



第1部活動報告会の様子



第2部パネルディスカッションの様子